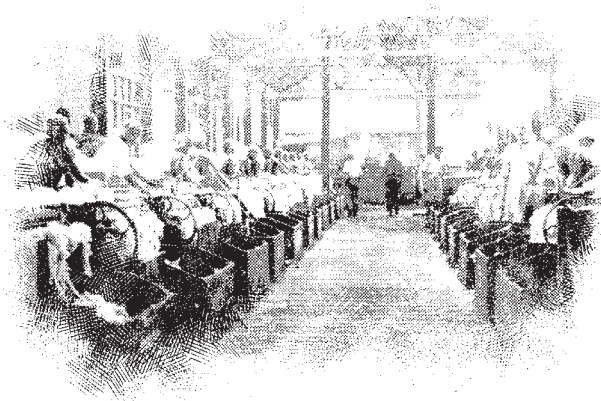


第5章

日本綿花

喜多又蔵の死、綿布輸出世界一への貢献



喜多社長は
パリ講和会議に
随行してから
一気に名を上げたな

ほんまにそうや
大阪の三品取引所内に
綿花市場が開設されたが
パンフレットを作つて
農商務省を説得したとか

日本綿花は
大正一二(一九二二)年に
エジプトのアレクサンドリア
にて商社として初めて
出張所を開設していた

最近は
東アフリカに
熱心らしいぞ
日本領事や
横浜正金銀行も
日綿を頼りに
しているらしい

タンガニカ
(現・タンザニアの一部)
奥地のミケンにある
繰り綿工場を買収せよ
その工場に千ヘクタールの
土地があるそこで
綿花の試験栽培をしよう

はいっ!
日本人による東アフリカ
投資の第一号ですな
さらに東アフリカ
の綿花栽培第一号
でもあります

以降日綿はウガンダ、
タンガニカで九工場の
綿花関連会社を運営した

※ 昭和三(一九二八)年から二年間試験栽培を実施。

喜多社長は
天皇陛下から
会食に招かれ
東アフリカでの
綿花栽培について
ご質問を受けた
らしいぞ

なんと

喜多社長は
鉄道事業の方にも
忙しいと聞いたぞ

ああ
神戸・箕合と
大阪・桜島間の二六キロの
阪神海岸鉄道の計画か

神戸財界からは
川崎造船所の
松方幸次郎さん
鈴木商店の
鈴木岩治郎さん

そして
日本綿花監査役で
マツチ王の
瀧川儀作さん
大阪財界代表からは
稲畑勝太郎さん

喜多社長が発起人と
なったらしい

大阪商工会議所の
会頭選挙で喜多さんは
稲畑さんと争うほど
もう喜多さんは
大阪財界の顔や

しかし
この阪神海岸鉄道計画は
鈴木商店破綻を受けて
頓挫してしまった

和歌山へ交通新紀元刻々
阪和電気鉄道株式会社
以て和歌山線と山陽線に付し、和歌山の
新線開通に努むる事
事業概要の詳書
を請求書にて送付す

大阪
和歌山

大阪-和歌山間全通
阪和電鉄
明十六日より

和歌山

JR

阪和電鉄 開通

喜多又蔵は
紡績会社の仲間とともに
大阪・和歌山間を結ぶ
阪和電気鉄道の
設立発起人代表を務める
大正一五(一九二六)年開業
これが
現在のJR阪和線である

だが喜多は
この鉄道事業の
経験も無駄には
しない

大阪の皆は
鉄道開通もあって
有馬温泉ばかりだ
この
和歌山の白浜温泉を
もっと身近に感じて
もらいたい

喜多は
大正九年以降の
慢性不況期に
日綿社内において
経費節減と能率増進
の重要性を主張し
続けていた

しかし
鈴木商店の破綻……
世界恐慌……
そして日本綿花の
重要な中国市場では
日本排斥運動が
盛んとなる

昭和五(一九三〇)年
ついに日本綿花は
深刻な業績不振により
大きな損失を計上する

財界の大派
鈴木商店破綻

過度の膨張政策で破綻した鈴木商店のように
なってはならない
前車の轍を踏むことは
避けなければならぬ
減量経営に転換する



喜多は
横浜正金銀行に救済を求め
同行は減資案に応じ
経営再建に必要な融資を
継続した

……しかし
喜多又蔵の引責辞職を
求める声もあった

日清紡が
苦境に立たされた際
日綿は支援してくれた
米綿の売買でも進言し
日清紡の業績に寄与した
喜多君の辞任要求は
黙視するわけには
いかない

社員を日綿の
株主総会に出席させ
反対意見を述べて
阻止するように！

日綿だけの喜多くんではない
彼を財界から失うことは
国家の大損失である



日綿の経営危機が
表面化すると
手形取引を見直す
動きもあった

はいっ！

日清紡績社長
宮島清次郎

日綿と鐘紡は長年
手をつないで進んできた
どれだけ我々のために
尽くしてもらったか
それを思えば
窮地に立った時は
力を貸して早く脱出するよう
協力するのが我々のとるべき
道である
日綿に対する商いの
やり方はいささかも態度を
変えてはならないっ！

鐘紡績社長
武藤山治



喜多又蔵は
持病として
腎臓病と糖尿病
抱えていたが

社長として
あくまでも
困難に対処する
道を選んだ

今は堅実第一
主義であるが
かといって萎縮
しすぎても困る

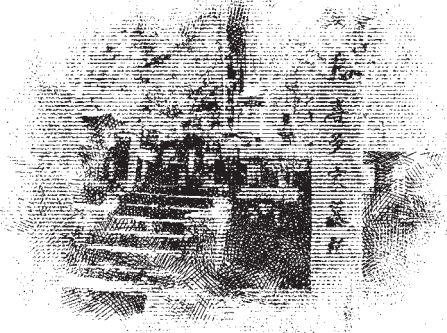
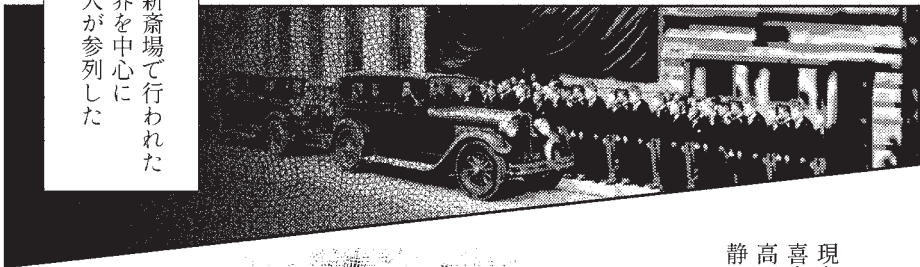
人材が揃い
社員の融和がある
日本綿花の回復は
時間の問題で
案外早いはずだ
日中貿易で果たして
きた役割は大きい

自信と誇りを持つよう

しかし
昭和七（一九三二）年
喜多は病状が悪化し
五四歳の若さで
亡くなった



大阪阿倍野新斎場で行われた社葬には財界を中心に約三〇〇〇人が参列した



現在 喜多又蔵は高野山・奥の院にて静かに眠っている



中興 日綿業三友好商社に
同業 大手商社では初めて

喜多の後 第八代社長には南郷三郎が就任 戦後日中輸出組合 理事長として唯一 毛沢東と会談した 商社マン として名高い

喜多が亡くなった翌年の昭和八(一九三三)年 日本綿布輸出は 英国を抜き世界一位となった 日本最大の産業である紡績業への 喜多又蔵の貢献は計り知れない